

*"A best method of teaching"  
If I teach again, I will pay  
a special attention on the poorest scholar  
in class. If I could do that, I  
believe, I can be a successful teacher.*

### A Best Method of Teaching

If I teach again, I will pay a special attention on the poorest scholar in the class. If I could do that, I believe, I can be a successful teacher.

### 最良の授業法

私がもう一度教えることがあれば、クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する。

<『新島襄全集』7、330頁。訳出は『現代語で読む新島襄』179頁>

新島 襄の言葉

竹山幸男（中学校教諭）

一八八五（明治十八年）年二月、再渡米した際、静養先のクリフトン・スプリングスで記した言葉の一つである。どんな学生であつても大切にすると新島の学生（生徒）観は、帰国後に、渡米中、退学処分を受けた生徒へ思いをはせ、涙を流し胸をつまらせ後悔しつつ、「一人一人ハ大切ナリ」（全集一、一〇七頁）と語っている姿とも相通ずるものがある。

このような新島の生徒観の根幹は何なのか。新島は、「人の偉大さは学識だけでなく私心（自分の欲）のなさに現れる。多く学ぶと自己中心的になりがちだ。十字架上のキリストに目を向け、キリストの生き方から謙虚さを学び、自分を犠牲にする生き方を学びたい」（全集七、三一一頁）と記したり、「諸君ヨリ先生々と曰ハル、ヲ悲ム、昨年一度我ハ諸君ノ余ヲ先生ト呼フ事ナキヲ乞ヘリ：我ハ価ナシ只タ神ノ意に従フノミ」（全集一、一〇九頁）と述べている。自らが神の前に弱くて小さな存在であることを認め、キリストの救いを通し、神に助けられ強められながら歩むという謙虚さが、新島の生き方の基本にあつた。

「同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル」チャペルのあるキャンパスで、思春期の只中の中学生と共に学ぶ教員の一人として、新島の抱いた生徒への思いに一步でも近づけるように、日々祈りながら歩んでいきたい。